

# 年頭所感



一般社団法人 家畜改良事業団  
理事長 伊地知 俊一

新年明けましておめでとうございます。皆様には常日頃より、家畜改良事業団の業務に格別のご理解、ご支援を賜っておりますことに対しまして心より御礼申し上げます。

昨年は新型コロナウイルスの世界的な感染拡大で経済、社会生活がこれまで経験したことのない大きな影響を受け、現在も感染拡大が継続していることから、本感染症に対する対応が世界的な課題となっております。皆様方に於かれてもお仕事を遂行されるうえで大変なご苦勞をされていることと拝察いたします。当団でも、マスク着用、手指消毒の励行、三密の回避などを基本に、精液等の配布については配布先の要望に応じた適切な予防措置をとることを徹底し業務の効率的な推進に努めているところです。

我が国の畜産を巡る最近の情勢につきましては、昨年の2月1日現在の牛の飼養戸数については乳用牛が14,400戸、肉用牛が43,900戸でそれぞれ前年から4%と5.2%の減少となりましたが、飼養頭数については、乳用牛が135万2,000頭、対前年比101.5%で3年連続の増加、肉用牛は255万5,000頭、対前年比102.1%でいずれも前年を上回り生産に回復の兆しが見られます。

一方、新型コロナウイルスの日本を含む世界的な感染拡大が牛肉や牛乳・乳製品の需給関係にも影響を及ぼしています。巣ごもり需要で家計消費は増加していますが、インバウンドを含む業務用需要などの減少で、特に、牛肉は枝肉価格が低下し、子牛価格の低下ももたらしています。このような状況に対し政府におかれては、経営安定対策など各種対策を講じておられ、その効果もあり、牛肉の枝肉価格や子牛価格も回復傾向にあります。当団といたしましても家畜の改良と関連業務を通じて農家の収益性向上を通じた経営の安定と経営体質の強化を支援し、当団の使命を果たしていかなければならないと認識しております。

このため、本年も引き続き、効率的な優良種畜の選抜、作出のための乳用種雄牛後代検定事業、肉用牛産肉能力平準化促進事業、酪農経営改善のための乳用牛群検定を推進するとともに、性選別精液や体外受精卵

の供給の強化、ゲノミック評価や牛肉のおいしさに関する研究等を充実し、我が国畜産の振興に寄与できるよう努めてまいります。

ゲノミック評価技術は米国で開発され、わが国では平成20年から乳用牛について取組みが開始されました。平成25年から泌乳形質や体型形質、繁殖・管理形質等についてのゲノミック評価が独立行政法人家畜改良センターで実施され、酪農家での利用が可能となっております。

当団では肉用牛について、平成24年度から技術開発に取り組み、平成30年に枝肉6形質について実用化し、同年8月から種雄牛選抜に活用しています。

また、令和元年には牛肉のおいしさの要素といわれているオレイン酸などの脂肪酸組成形質のゲノミック評価技術についても実用化し、同年9月から評価の受託を開始しました。

ゲノミック評価技術は、特に、若い雌牛の遺伝的能力の把握に有効であるため、酪農家や肉用牛繁殖農家が雌牛の遺伝的能力を早期により正確に把握し、種雄牛のゲノミック育種価を踏まえた交配を行うことで、優良な後継牛の確保だけでなく生産される肥育用素牛の遺伝的能力を効率的に高め、販売価格の上昇により収益性向上を図ることが期待できます。

当団はゲノミック評価をより多くの農家の収益性向上、経営改善に活用していただくために、昨年12月1日から、Webでこれらのゲノミック評価結果の最新情報を常に閲覧し、評価を実施した牛、牛群全体のゲノミック育種価の一覧表示や各種グラフによる分析や交配種雄牛の選択とその産子の能力予測を可能にするシステム、「肉用牛ゲノミック評価Web情報提供サービス（G-Eva:ジーバ）」の運用を開始致しました。今後とも、ゲノミック評価等の具体的な利用法の情報提供等に努め、利便性の向上を図っていくこととしております。

最後になりましたが、皆様の引き続きの当団業務へのご支援ご協力をお願い申し上げますとともに、今年一年が皆様にとってよい年となりますよう祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。